

## 広島・草戸千軒町遺跡

あり、その下層にも径二〇～八〇cm大の石が埋っていた。SG一七九一は東西一八m以上×南北一四mの池である。SK一八二五は東西二・五m×南北五mの長円形を呈する土壙である。

- |   |       |                        |
|---|-------|------------------------|
| 1 | 所在地   | 広島県福山市草戸町              |
| 2 | 調査期間  | 一九七九年（昭54）一月十九日～十一月三十日 |
| 3 | 発掘機関  | 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所        |
| 4 | 調査担当者 | 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所代表 松下正司 |
| 5 | 遺跡の種類 | 集落跡                    |

- 6 遺跡の年代 平安～江戸時代

- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一九七九年度には、第二七次調査として東西・南北共四〇mの一六〇〇m<sup>2</sup>を、遺跡包蔵中州北部で実施した。前年度までに調査区北方では東西方向・南北方向の石敷道路・柵列や土壙・池・溝・柱穴などを、調査区東方では溝・石積護岸などを検出し、柵と溝に囲まれた町割の様相が次第に明らかになり始めている。

木簡はSD五六〇・一三七五の各溝やSG一七九〇・一七九一池、SK一八二五土壙から八八点が出土した。SD五六〇は長さ三二m×幅二・五～四・五mを測る東西溝である。SD一三七五は幅二・五～六・五m×深さ〇・五mを測る南北溝で、今次調査までに長さ四六・五mを検出した。SG一七九〇は東西一三m×南北八mの長方形を呈する池で、上部には焼土・壁土・炭・灰を多く含む小礫が

伴出遺物は土製品・木製品など種類が多く、特にSG一七九〇・一七九一は顯著である。共伴した土師質土器からSD一三七五・SG一七九〇・一七九一・SK一八二五は室町時代前半、SD五六〇は室町時代後半に比定される。

- 8 木簡の釈文・内容

木簡は八八点が出土した（墨痕の見られないものがほかに九点ある）。この中には柿経（3）や呪符（4・9）など庶民信仰と関連の深いものや、舟形木製品に「下」の字が認められるものもある。この様な特殊なものを除くと形態的には表面長方形ないし削り込んだ角材の一端に焼火箸で孔を穿ったものが多く、長方形の材の一端の左右に切込みを入れたものや断片・削屑がある。内容的には荷札ないし商いをする際のメモと思われるものがほとんどである。以下、主なものについて遺構ごとに列挙する。

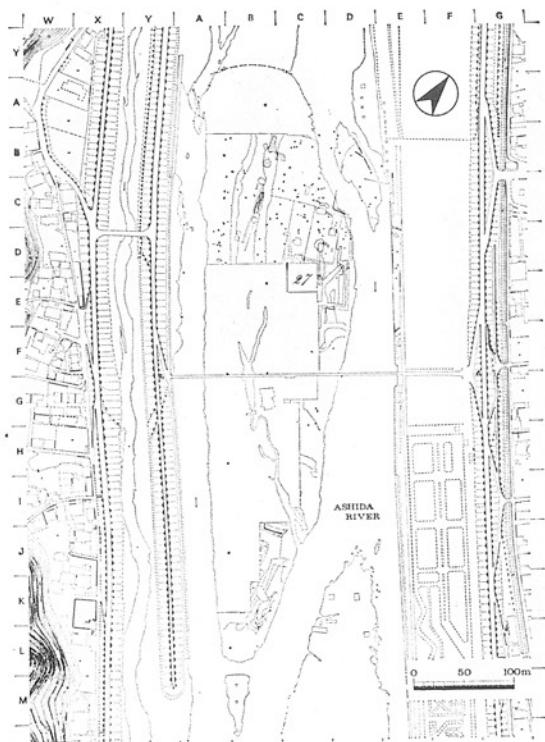
SD五六〇

(1) 「あつき百文□□□

□□こ

□□〔五カ〕いたす」

1979年出土の木簡



草戸千軒町遺跡概念図

- (2) 「米一□かりたく  
候へく候」  
・「[兵力]  
えせう殿」
- (3) 「南无阿弥陀佛」
- (4) 「鬼[鬼]」
- SD-III七四  
(138×25×20 074)
- (5) 「尤可為本望歟」  
・「本□」  
133×17×2 016
- (6) 「於し免」  
・「本□」  
(101)×18×2 081
- SG-七九一  
(80)×17×2 034
- (7) 「古□□」  
222×(34)×2 061
- (8) 「伍貫文拾貫  
のうち」  
・「△ま川の(花押)」  
SK-H-八一五  
56×25×5 032
- (9) 「咄天正蘆」  
215×19×2 017

(1)は小豆、(2)は米、(8)は銭の売買・貸借の時使われたものである。花押の記されたものは本遺跡では初見である。(9)は北極星に関する呪いである。

#### 9 関係文献

井鹿見啓太郎・小田原昭嗣・糸  
井崇雄・檀上誠・福島政文  
告」(調査研究ニュース『草戸千軒』No.76)一九七七年(志田原重人)



1, 2 草戸千軒町遺跡  
出土木筒 (8)(2)  
尾道市街地遺跡  
出土木筒

3  
1  
2  
3  
4  
5  
6  
7

## 広島・尾道市街地遺跡

所在地 広島県尾道市久保二丁目

2 調査期間 一九七九年（昭54）十一月七日～八〇年二月七日

3 発掘機関 尾道市教育委員会（尾道遺跡発掘調査団）

4 調査担当者 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 山県 元

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 室町～江戸時代

7 遺跡及び木筒出土遺構の概要

尾道市街地遺跡は、現市街地下に埋れた中・近世の集落跡（港町）で、昭和52年度から国・県の補助金を得て尾道市教育委員会が調査主体となり広島県草戸千軒町遺跡調査研究所が協力して継続的に行なっている。

今回の調査地点は市街地東部の久保二丁目で、一九七九年六月の大火跡地の一部（五×二二mの範囲）である。地表下三・八mまで調査し、十一の層位に分けて遺物をとりあげることができた。主な遺構としては室町時代末期の焼土層から備前焼の二石甕を四個ずつ二列に並べたものが検出されたほか石垣・柱列・杭列などがあった。御札は室町時代後半に比定される第八層暗灰粘質土層から土師質土器椀・皿・鍋・釜・備前焼壺・すり鉢・青磁椀・曲物などと共に